

消化器外科専門医筆記試験問題 (第 19 回より抜粋)

- 1 脾腫について誤っているのはどれか。
- a 脾悪性腫瘍では転移性脾腫瘍が最も多い。
 - b 脾臓を固定する間膜・ヒダには、胃脾間膜、横隔脾ヒダなどがある。
 - c 脾臓には濾過機能、免疫学的機能、貯蔵機能、造血機能がある。
 - d 健常成人の脾臓は長径 10~12cm, 幅 6~8 cm, 重量 80~120g である。
 - e 脾動脈は背腓動脈, 大腓動脈などを分岐する。
- 2 大腸癌に対する結腸右半切除について誤っているのはどれか。
- a 約 50% の症例では中結腸動脈と右結腸動脈が共通幹を形成する。
 - b 進行癌には D3 郭清が基本である。
 - c Non-touch isolation technique は術後再発を減少させる術式として確立している。
 - d 腸管切除は腫瘍縁から 10cm 以上を保つ。
 - e 治癒切除術後の再発としては肝転移が最も多い。
- 3 胃癌手術におけるリンパ節郭清について正しいのはどれか。
- a 食道浸潤 3cm 以内の胃癌に対しては、経裂孔的アプローチに比べ、左開胸開腹による縦隔内リンパ節郭清は予後改善につながる。
 - b 大動脈周囲リンパ節転移を認めた症例に対する大動脈周囲リンパ節郭清は予後延長が期待できる。
 - c 上部進行胃癌に対する予防的脾門部リンパ節郭清は、摘脾ではなくスタレ郭清が標準治療として推奨されている。
 - d 胃癌における D2 と D1 との比較試験である Dutch Trial では、D2 群の手術関連死亡率は D1 群に比べ有意差はなかった。
 - e 胃癌治療ガイドラインでは、L 領域の深達度 M の N0 症例に対しては、D1+No. 7, 8a の縮小手術が推奨されている。
- 4 術前の食道造影像 (写真 1), 内視鏡像 (写真 2), 造影 CT 像 (写真 3), MR Angiography 像 (写真 4) および術中の右頸部所見 (写真 5) を示す。
- 本胸部食道癌例で合併していると考えられる先天異常はどれか。
- a 右大動脈弓
 - b 食道閉鎖症
 - c 重複大動脈弓
 - d 右鎖骨下動脈起始異常
 - e 左鎖骨下動脈起始異常
- 5 鼠径ヘルニアについて正しい組合せはどれか。
- a Kugel 法 ————— onlay patch
 - b Hesselbach 三角 ——— 大腿輪
 - c Mesh plug 法
————— preperitoneal hernia repair
 - d MacVay 法 ————— 大腿ヘルニア
 - e Bassini 法 ————— tension free repair
- 6 正しい組合せはどれか。
- a Chagas 病 ————— 噴門弛緩症
 - b Zenker 憩室 ————— 牽引性
 - c Boerhaave 症候群 ————— 食道気道瘻
 - d Mallory-Weiss 症候群 ——— 胸痛
 - e Plummer-Vinson 症候群 ——— 鉄欠乏性貧血
- 7 誤っている組合せはどれか。
- a 急性膵炎 ————— 低カルシウム血症
 - b 急性膵炎 ————— 胆石
 - c 慢性膵炎 ————— 糖代謝障害
 - d 自己免疫性膵炎 ——— 主膵管狭細像
 - e 自己免疫性膵炎 ——— 低 IgG 血症
- 8 誤っている組合せはどれか。
- a Mirizzi 症候群 ——— 総肝管狭窄
 - b Murphy 徴候 ————— 急性胆嚢炎
 - c Confluence stone ——— 肝内結石
 - d Lemmel 症候群 ————— 十二指腸傍乳頭憩室
 - e Courvoisier 徴候 ——— 十二指腸乳頭部癌
- 9 胃の腫瘍と治療薬で誤っている組合せはどれか。
- a 限局性 MALT リンパ腫
————— AMPC + CAM + PPI
 - b 切除不能進行胃癌 ——— CDDP + S-1
 - c Stage II 胃癌術後 ——— S-1

- d Diffuse large B cell リンパ腫
 —————R-CHOP
- e 平滑筋肉腫—————スニチニブ
- 10 分子標的薬とその標的分子で誤っている組合せはどれか.
- a トラスツズマブ—————HER2 蛋白
- b ゲフィチニブ
 —————c-kit のチロシンキナーゼ
- c インフリキシマブ—————TNF- α
- d セツキシマブ
 —————上皮成長因子受容体 (EGFR)
- e ベバシズマブ
 —————血管内皮細胞増殖因子 (VEGF)

11 正しい組合せはどれか.

- a 内痔核—————Gant-三輪法
- b 痔瘻—————内括約筋切開術
- c pilonidal cyst —————Milligan-Morgan 法
- d 裂肛—————Seton 法
- e 便失禁—————graciloplasty

12 抗悪性腫瘍薬の有害事象として誤っている組合せはどれか.

- a 塩酸ゲムシタピン—————間質性肺炎
- b オキサリプラチン—————神経障害
- c フルオロウラシル—————皮膚障害
- d 塩酸イリノテカン—————心筋障害
- e サイクロフォスファミド
 —————無精子症

13 転移性肝癌について正しい組合せはどれか.

- a 腫瘍中心部—————早期濃染
- b 転移病巣の肝内門脈枝浸潤・閉塞
 —————当該領域の動脈性濃染
- c 大腸癌肝転移例での切除断端距離 5mm 以下
 —————断端再発危険率 30%
- d 胃癌肝転移—————系統的肝切除
- e FOLFOX —————中枢神経障害

14 胸部食道癌について正しいのはどれか.

- (1) リンパ節転移個数は有力な予後因子とはならない.
- (2) 頸部リンパ節転移は上深頸リンパ部に多く認め

られる.

- (3) 転移や再発が進行すると低 Ca 血症となることが多い.
- (4) 最もリンパ節転移頻度が高い部位は反回神経周囲の気管近傍である.
- (5) 粘膜下層癌のリンパ節転移頻度は筋層に達する胃癌のリンパ節転移頻度に等しい.
- a (1), (2) b (1), (5) c (2), (3)
- d (3), (4) e (4), (5)

15 *Helicobacter pylori* 除菌治療について正しいのはどれか.

- (1) 二次除菌にはメトロニダゾールを用いる.
- (2) 胃炎は保険診療の対象となる.
- (3) アモキシシリンの耐性が問題となっている.
- (4) 除菌後 2 週間以内に除菌判定を行う.
- (5) 除菌により血清ガストリン値は低下する.
- a (1), (2) b (1), (5) c (2), (3)
- d (3), (4) e (4), (5)

16 胃カルチノイドについて正しいのはどれか.

- (1) 神経内分泌腫瘍である.
- (2) 腫瘍径 10mm 以下のものが多い.
- (3) カルチノイド症候群をおこしやすい.
- (4) 肝転移は極めてまれである.
- (5) 腫瘍径 20mm 以下の同サイズの早期胃癌と比べてリンパ節転移頻度が低い.
- a (1), (2) b (1), (5) c (2), (3)
- d (3), (4) e (4), (5)

17 正しいのはどれか.

- (1) 潰瘍性大腸炎の治療でプレドニゾロン総投与量が 13,000mg では手術を考慮する.
- (2) 潰瘍性大腸炎における回腸囊肛門管吻合術後の残存肛門管上皮の癌発生率は 10% である.
- (3) Crohn 病の大腸狭窄例はインフリキシマブの積極的な適応である.
- (4) Crohn 病における腸切除術の再手術率は大腸型で高い.
- (5) Crohn 病に合併する難治性痔瘻の治療には Seton 法が有効である.
- a (1), (2) b (1), (5) c (2), (3)
- d (3), (4) e (4), (5)

18 肺血栓塞栓症/深部静脈血栓症（静脈血栓塞栓症）について正しいのはどれか。

- (1) 予防ガイドラインでは、40歳以上の癌の大手術は高リスク群となる。
 - (2) 予防ガイドラインでの低リスクレベルでの推奨予防法は、早期離床および積極的な運動である。
 - (3) 深部静脈血栓症の診断には、理学的所見よりも超音波検査が有用である。
 - (4) 肺血栓塞栓症の診断には、胸部造影CTよりも肺換気・血流シンチが有用である。
 - (5) 低分子ヘパリン使用では、ヘパリン起因性血小板減少症は起こらない。
- a (1), (2), (3) b (1), (2), (5)
c (1), (4), (5) d (2), (3), (4)
e (3), (4), (5)

19 内腸骨動脈から分枝するのはどれか。

- (1) 上直腸動脈
 - (2) 上膀胱動脈
 - (3) 閉鎖動脈
 - (4) 子宮動脈
 - (5) 卵巣動脈
- a (1), (2), (3) b (1), (2), (5)
c (1), (4), (5) d (2), (3), (4)
e (3), (4), (5)

20 急性膵炎について正しいのはどれか。

- (1) 感染性膵壊死の確定診断には局所の穿刺吸引を行う。
 - (2) 壊死性膵炎の場合早期手術を行う。
 - (3) 感染性膵壊死に対して手術を行う場合は膵床ドレナージ術を行う。
 - (4) 出血性膵壊死の診断にMRIはCTより有用なことが多い。
 - (5) 胆石性膵炎は緊急ERCPの適応である。
- a (1), (2), (3) b (1), (2), (5)
c (1), (4), (5) d (2), (3), (4)
e (3), (4), (5)

21 脾臓摘出術が適応となり得る疾患はどれか。

- (1) 食道胃静脈瘤
- (2) 血栓性血小板減少性紫斑病
- (3) サラセミア
- (4) 自己免疫性溶血性貧血

(5) 遺伝性球形赤血球症

- a (1), (2), (3) b (1), (2), (5)
c (1), (4), (5) d (2), (3), (4)
e (3), (4), (5)

22 胃切除後障害について正しいのはどれか。

- (1) 悪性貧血は胃全摘術5年以降に出現しやすい。
 - (2) 鉄欠乏性貧血は術後5年以降に出現しやすい。
 - (3) 慢性輸入脚症候群では胆汁を含まない嘔吐が特徴である。
 - (4) 急性輸入脚症候群では急性膵炎が見られる。
 - (5) 胆石症は神経温存術式で起こりにくい。
- a (1), (2), (3) b (1), (2), (5)
c (1), (4), (5) d (2), (3), (4)
e (3), (4), (5)

23 消化器内視鏡について誤っているのはどれか。

- (1) 抗血栓療法中の内視鏡検査は禁忌である。
 - (2) 内視鏡は毎回滅菌する。
 - (3) 吐血によるショック患者には直ちに上部消化管内視鏡検査を行う。
 - (4) 鎮静剤投与時にはサチュレーションモニターは必須である。
 - (5) 消化管穿孔の疑いがある場合に上部消化管内視鏡検査を行う。
- a (1), (2), (3) b (1), (2), (5)
c (1), (4), (5) d (2), (3), (4)
e (3), (4), (5)

24 原発性肝癌で正しいのはどれか。

- (1) 肝細胞癌切除後の5年生存率は30%である。
 - (2) C型肝硬変は肝内胆管癌の危険因子である。
 - (3) 肝細胞癌切除後の累積再発率は5年で70~80%である。
 - (4) 経口避妊薬は肝細胞癌の危険因子である。
 - (5) 肝細胞癌のHBs抗原陽性率は5%である。
- a (1), (2), (3) b (1), (2), (5)
c (1), (4), (5) d (2), (3), (4)
e (3), (4), (5)

25 65歳の男性。生来健康であった。排尿時痛と肛門部違和感を主訴に当院を受診した。直腸指診で肛門部直上の粘膜下に、表面平滑で可動性の乏しい硬い腫瘤を触知した。

初診時検査所見：赤血球 427 万, Hb13.8g/dl, 白血球 7,200, AST 12 単位, ALT 15 単位, CEA 1.3ng/dl, CA19-9 13 単位, PSA 1.3ng/ml.

注腸造影像 (写真 6) および MRI 像 (写真 7) を示す.

考えられる治療と所見はどれか.

- (1) リンパ節郭清は不要である.
 - (2) 固有筋層から発生する.
 - (3) 術前化学放射線治療が有効である.
 - (4) 消化管の好発部位は直腸である.
 - (5) 針生検で術前治療の選択もある.
 - a (1), (2), (3) b (1), (2), (5)
 - c (1), (4), (5) d (2), (3), (4)
 - e (3), (4), (5)
- 26 36 歳の男性. 交通外傷で救急搬送された. 来院時 血圧 90/60mmHg, 脈拍 110/分, 意識清明であった. 全身検索の結果, 腹部の鈍的外傷を認めた. 腹部 CT 像 (写真 8) を示す. そのほか胸部, 頭部に異常は認められなかった. 乳酸加リンゲル液を 2,000ml 急速輸液を行ったが, 血圧は 80/50mmHg, 脈拍 120/分であった. さらなる治療として正しいのはどれか.
- a アルブミン製剤 + 乳酸加リンゲル液の大量投与の追加
 - b 肺炎球菌ワクチンの接種
 - c Interventional Radiology による動脈塞栓術
 - d 止血のための緊急開腹術
 - e 腹部ドレナージ

27 60 歳の男性. 下血を主訴として来院. 直腸指診では肛門縁より 5cm に可動性良好な腫瘤を触知. 注腸造影像 (写真 9) および CT 像 (写真 10) を示す.

正しいのはどれか.

- (1) 低分化腺癌である.
- (2) 前立腺浸潤が疑われる.
- (3) 腹会陰式直腸切断術の適応である.
- (4) 全直腸間膜切除術の適応である.
- (5) 側方リンパ節郭清の適応である.
 - a (1), (2) b (1), (5) c (2), (3)
 - d (3), (4) e (4), (5)

28 33 歳の女性. 2 年前よりつかえ感が出現し, 食事のたびに嘔吐を繰り返している. 内視鏡像 (写真 11) および上部消化管造影像 (写真 12) を示す. 正しいのはどれか.

- (1) CT は有用でない.
- (2) 食道内圧測定は有用である.
- (3) 発症頻度は 1/100,000 人である.
- (4) 手術療法では逆流防止のための付加処置が必要である.
- (5) 通常は一過性であり経過とともに食道の拡張はなくなる.
 - a (1), (2), (3) b (1), (2), (5)
 - c (1), (4), (5) d (2), (3), (4)
 - e (3), (4), (5)

29 67 歳の男性. 直腸癌術後, 経過観察中の血液生化学検査で胆道系酵素上昇を認め, 精査入院となった. 自覚症状はない.

入院時血液生化学検査：総ビリルビン 1.5mg/dl, アルカリフォスファターゼ 617 単位 (基準値 115~359), γ GTP 346 単位 (基準値 5~60), LAP 111 単位 (基準値 25~70). 腫瘍マーカー：CEA 1.9ng/ml, CA19-9 120 単位.

腹部造影 CT 像 (写真 13) を示す.

適切な術式はどれか.

- a 胆道バイパス術
- b 胆嚢摘出術 + T チューブドレナージ
- c 肝外胆道切除 + 胆道再建術
- d 臍頭十二指腸切除術
- e 臍頭十二指腸切除術 + 門脈合併切除術

30 57 歳の男性. 上腹部不快感と体重減少を主訴に来院した. 上部消化管造影像 (写真 14) を示す.

腫瘍マーカー：CEA 5.9ng/ml, CA19-9 45.3 単位, CA125 155 単位 (基準値 1~35 単位).

正しいのはどれか.

- (1) 胃壁の間質成分の増殖が著しい.
- (2) 腹膜転移を起こしやすい.
- (3) 蛋白漏出を起こしやすい.
- (4) 内視鏡検査で早期発見しやすい.
- (5) 高年齢層に好発する.
 - a (1), (2) b (1), (5) c (2), (3)
 - d (3), (4) e (4), (5)

写真 1



写真 2



写真 3

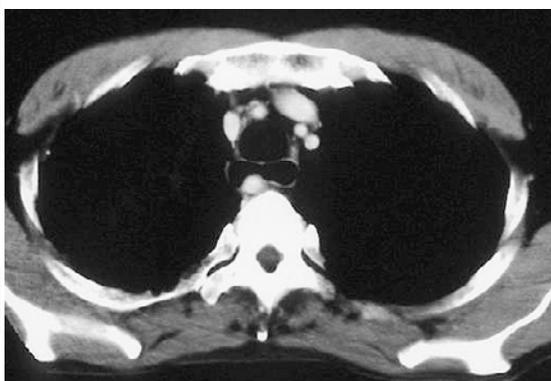


写真 4

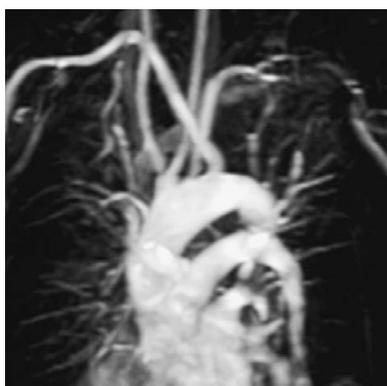


写真 5

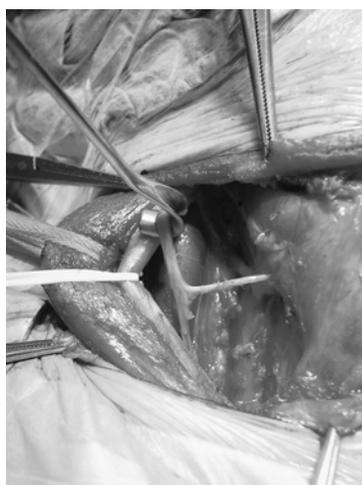


写真6



写真7



写真8



写真9

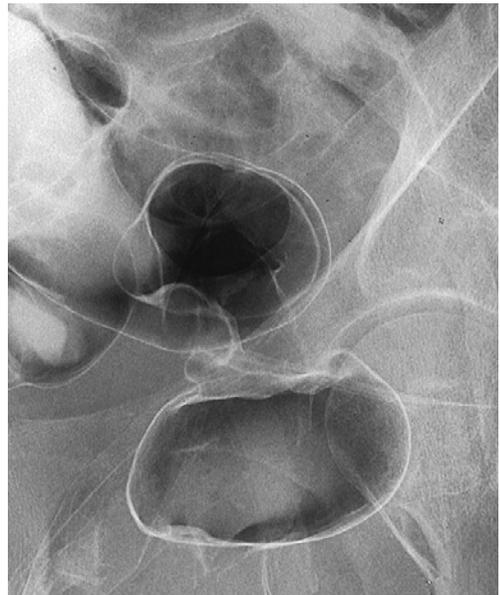


写真 10



写真 11

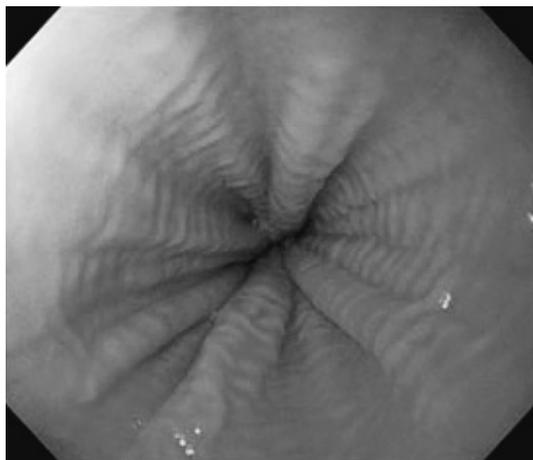


写真 12



写真 13

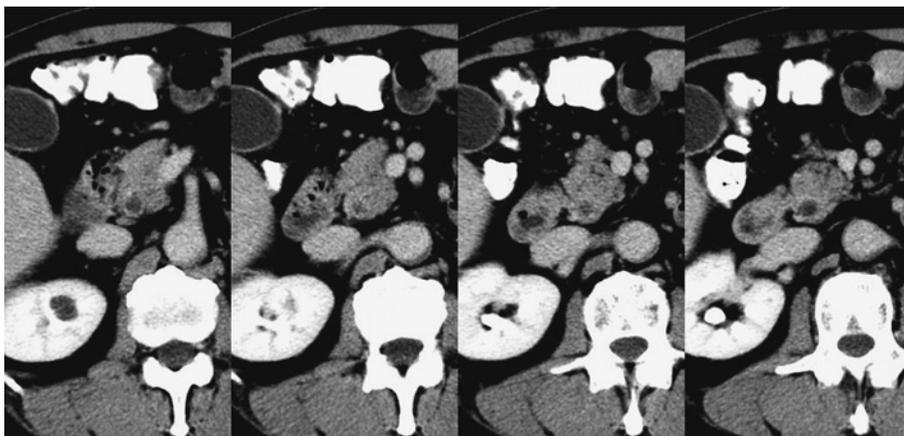


写真 14

